

8 月 6 日は忘れられてしまうのか

福島知津子

この文章がウェブサイトに掲載するときには、新学期が始まり、日本の「平和について考える 8 月」も終わっている。が、めったに経験できないことがあったので、僭越ながらこの紙面にてご報告したいと思う。

新大阪駅でレジャーに向かうたくさんの旅行客にまみれて、ようやく新幹線に乗車できた筆者には、大阪にいる限り「日本中、みんなが 8 月 6 日を忘れてしまう日はそう遠くない」とずいぶん悲観的に感じていた。

これが広島駅に着くと、とにかく子どもが多い。しかもなぜか制服姿で列をなして歩いている。前日から広島電鉄（市内路面電車）に、制服を着た中学生や高校生がたくさん乗車していて、平和記念公園に向かっていた。その手には紙袋が、またその中には千羽鶴が束ねられているのを見てようやく気づいた。つい、大阪での自分の認識は、夏休み真っ盛りに、「戦争のことを真剣に考える」子どもが、こんなにたくさんいるとは想像もできなかったのだ。実は、平和記念式典には子どもたちが多くかかわるよう、なされている。「平和への誓い」は子どもによって宣言され、毎年交代で地元の中学校の吹奏楽部が式典にて演奏する。筆者は以前、広島県内の大学にて非常勤講師として授業を担当したことがあるが、広島の子どもたちは曾祖父や曾祖母、祖父や祖母など身近な親族に被爆者がいる者が少なくない。私の個人的な感覚で恐縮であるが、四国や近畿の子どもたちに比べ、広島は「原爆」や「被爆者」に対する距離感が圧倒的に違っていると感じていた。現に、式典の一般席にも広島市内の高校生たちが多く参列していた。

めったにない経験とはここからである。式典後、公園を去ろうとしたところ、突然後ろから声をかけられた。「東京からきた小学生です。アンケート（インタビュー）いいですか。」と 7 人ほどの 6 年生に囲まれてしまった。彼女・彼らから問われた質問は、「式典に出席されて、どのようなお気持ちですか」、「原爆ドームを保存することについてどう思いますか」、「あなたにとっての平和とはどういうものですか」、「今は平和だと思いますか」というものであった。それらになるべく簡潔、わかりやすい語彙を使って答えた（と筆者は思っている）のち、「ありがとうございました。」とみなが深々と一礼をし、次のインタビューを尋ねる人のところへ去っていった。それはほんのすぐ近く、そこに見える場所でベンチに腰かけているご高齢のご婦人に彼女ら・彼らはインタビューを行っていた。その様子に実に感銘を受けた。その話しを聞いている彼らは、地面に膝をついて、手を膝に置き、目線

が下にならないよう、インタビューを受けてくださったご婦人を見上げ、誰一人気を散らすことなく、その方の話しを真剣な面持ちで聞いていた。そのこどもたちの様子に感心し、それと同時に安心感を得た。もちろん、この式典後にインタビューをするための学校における事前指導がきちんとなされていることは十分に理解できるが、あの真剣なまなごしは、教師がどうこう言うてできるものでないことは瞬時にわかった。

こういう人たちがいる限り、少し安心できる、そう思えた。もしかすると、そのこどもたちも東京へ戻れば、やんちゃやわがままな様子を親に見せるかもしれないが、少なくとも、広島「切実な祈りで溢れたあの場」において、彼ら・彼女たちは年齢に関係なく、「人」として平和を真剣に考えていた。あの真剣なまなごしに我々、毎日心を亡くしたかのよう「忙しく」している大人も十分に見習うべきところがあると反省するとともに、悲観ばかりせず、将来に期待をもつことも大切なのだと感じた。

(福島知津子 専任講師／教員養成センター)
